

A
i
g
a
n
d
o

道楽と職業

夏目漱石



道楽と職業



藍岩堂



ただいまは牧君の満洲問題——満洲の過去と満洲の未来というような問題について、大變条理の明かな、そして秩序のよい演説がありました。そこで牧君の披露に依ると、そのあとへ出る私は一段と面白い話をするというようになっているが、なかなか牧君のように旨くできませぬ。ことに秩序が無かろうと思う。ただいま本社の人が明日の新聞に出すんだから、講演の梗概を二十行ばかりにつづめて書けという注文でしたが、それは書けないと言って断ったくらいです。それじゃアしゃべらないかという、現にこうやってしゃべりつつある。しゃべる事はあるのですが、秩序とか何とかいう事が、ハッキリ句切りがついて頭に畳み込んでありませぬから、あるいは前後したり、混雑したり、いろいろお聴きにくいところがあるだろうと思います。ことにあなた方の頭も大分^{つか}労れておいででしょうから、まずなるべく短かく申そうと思う。

私の申すのは少しもむずかしいことではありません。満洲とか安南とかいう対外問題とは違って極^{ごく}やさしい「道楽と職業」という至極^{しごく}簡単なみだしです。内容も従って簡単なものであります。まあそれをちょっとわずかばかり御話をしようと思う。

元来こんな所へ来て講演をしようなどとは全く思いもよらぬことでありましたが、「是非出て来い」とこういう訳で、それでは何か問題を考えなければならぬからその問題を考える時間を与えてくれと言いましたら、社の方では宜^{よろ}しいと云って相応^{にっし}の日子を与えてくれました。ですから考えて来ないということも言えず、出て来ないということも無論言えず、それでとうとうここへ現^{あかし}われる事になりました。けれども明石という所は、海水浴をやる土地とは知っていましたが、演説をやる所とは、昨夜到着するまでも知りませんでした。どうしてああいう所で講演会を開くつもりか、ちょっとその意を得るに苦しんだくらいであります。ところが来て見ると非常に大きな建物があって、あそこで講演をやるのだと人から教えられて始めてもっともだと思いました。なるほどあれほどの建物を造ればその中で講演をする人をどこからか呼ばなければいわゆる宝の持腐れになるばかりであります。したがって西日がカンカン照って暑くはあるが、せっかくの建物に対しても、あなた方は来て見る必要があり、また我々は講演をする義務があるとでも言おうか、まアあるものとしてこの壇上に立った訳である。

そこで「道楽と職業」という題。道楽と云いますと、悪い意味に取るとお酒を飲んだり、または何か花柳社会へ入ったりする、俗に道楽息子と云いますね、ああいう息子のする仕業^{しわざ}、それを形容して道楽という。けれども私のここで云う道楽は、そんな狭い意味で使うのではない、もう少し広く応用^きの利く道楽である。善い意味、善い意味の道楽という字^よが使えるか使えないか、それは知りませぬが、だんだん話して行く中に分るだろうと思う。もし使えなかったら悪い意味にすればそれでよいのであります。

道楽と職業、一方に道楽という字を置いて、一方に職業という字を置いたのは、ちょうど東と西というようなもので、南北あるいは水火、つまり道楽と職業が相闘うところを話そうと、こういう訳である。すなわち道楽と職業というものは、どういふように関係して、どういふように食い違っているかということをもまず話して——もっともその道楽も職業も、すでに御承知のあなた方にそういう事を言う必要もなし、私も強^しいてやりたくはないが、しかし前^{ぜん}申したような訳でわざわざ出て来たものだから、そこはあなた方にすでに御分りになっている程度以上に、一歩でももう少し明かに分らせることが、私の力でできればそれで私の役目は済んだものと内々たか^{くく}を括

っているのであります。

それで我々は一口によく職業と云いますが、私この間も人に話したのですが、日本に今職業が何種類あって、それが昔に比べてどのくらいの数に殖^ふえているかということを知っている人は、おそらく無いだろうと思う。現今の世の中では職業の数は煩^{はんざつ}雑になっている。私はかつて大学に職業学という講座を設けてはどうかということ考えた事がある。建議しやませぬが、ただ考えたことがあるのです。なぜだというと、多くの学生が大学を出る。最高等の教育の府を出る。もちろん天下の秀才が出るものと仮定しまして、そうしてその秀才が出てから何をしているかという、何か糊口^{ここう}の口がないか何か生活^{てづる}の手蔓はないかと朝から晩まで捜して歩いている。天下の秀才を何かないか何かないかと血眼^{ちまなこ}にさせて遊ばせておくのは不経済の話で、一日遊ばせておけば一日の損である。二日遊ばせておけば二日の損である。ことに昨今のように米価の高い時はなおさらの損である。一日も早く職業を与えれば、父兄も安心するし当人も安心する。国家社会もそれだけ利益を受ける。それで四方八方良いことだらけになるのであるけれども、その秀才が夢中に奔走して、汗をダラダラ垂らしながら捜しているにもかかわらず、いわゆる職業というものがあまり無いようです。あまりどころかなかなか無い。今言う通り天下に職業の種類が何百種何千種あるか分らないくらい分布配列されているにもかかわらず、どこへでも融通^きが利くべきはずの秀才が懸命^かに馳け廻っているにもかかわらず、自分の生命を託すべき職業がなかなか無い。三箇月も四箇月も遊んでいる人があるのでこれは気の毒だと思つと、豈計^{あにはか}らんやすでに一年も二年もボンヤリして下宿に入つてなすこともなく暮しているものがある。現に私の知っている者のうちで、一年以上も下宿に立て籠^{こも}って、いまだに下宿料を一文も払わないで茫然^{ぼうぜん}としている男がある。もっとも下宿の方でも信用しているから貸しておくし、当人もどうかなるだろうと思つて安心はしているらしいが国家の経済からいうとずいぶん馬鹿気た話であります。私も多少知っている間柄^{あいだがら}だから気の毒に思つて、職業は無いか職業は無いかぐらい人に尋ねて見るが、どこにもそう云う口が転がっていないので残念ながらまだそのままになっています。けれども今言う通り職業の種類が何百通りもあるのだから、理窟^{りくつ}から云えばどこかへぶつかつてしかるべきはずだと思つのです。ちょうど嫁を貰うようなもので自分の嫁はどこかにあるにきまつてるし、また向うでも捜しているのは明らかな話ですが、つい旨^{うま}く行かないといつまでも結婚が後れてしまう。それと同じでいくら秀才でも職業にぶつからなければしようがないのでしょう。だから大学に職業学という講座があつて、職業は学理的にどういふように発展するものである。またどういふ時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出て来るものである。と一々明細に説明してやつて、例えば東京市の地図が牛込区とか小石川区とか何区とかハッキリ分つてるように、職業の分化^{りょうぜんえとく}発展の意味も区域も盛衰も一目の下に瞭然^{りょうぜんえとく}会得できるような仕かけにして、そうして自分の好きな所へ飛び込ましたらまことに便利じゃないかと思う。まあこれは空想です。実際やつて見ないから分らぬが、恐らくできますまい。できたらよかろうと思つただけです。非常に経済なことにはなるでしょう。

こんな考を起すほどに私は今の日本に職業が非常にたくさんあるし、またその職業が混乱錯雑しているように思つのです。現にこの間も往来を通つたら妙な商売がありました。それは家とか土蔵とかを引きずつて行くという商売なんだから私は驚いたのであります。この公会堂をこのま

ま他の場所へ持って行くという商売です。いくら東京に市区改正が激しく行われたって、そう毎年建てたばかりの家の位置を動かさなければならぬというように変化していやアしない。現に私の家などは建った時から今日まで市区改正に掛らずにいる。ほよど辺鄙な所にあるのだからでしょう。けれどもたとい繁華な所にいたって、そう始終家を引ッ張ッて貰わなければならぬという人はない。しかるにそれを専門に商売にしている者があるから、東京は広いと思ったのです。馬琴の小説には耳の垢取り長官とか云う人がいますが、他の耳垢を取る事を職業にでもしていたのでしょうか。西洋には爪を綺麗に掃除したり恰好をよくするという商売があります。近頃日本でも美顔術といって顔の垢を吸出して見たり、クリームを塗抹して見たりいろいろの化粧をしてくれる専門家が出て来ましたが、ああいう商売はおそらく昔はないのでしょうか。今日のように職業が芋の蔓みたようにそれからそれへと延びて行っているいろいろ種類が殖えなければ、美顔術などという細かな商売は存在ができなからうと思う。もっとも昔はかえって今にない商売がありました。私の幼少の時は「柳の虫や赤蛙」などと云って売りに来た。何にしたものか今はただ売声だけ覚えています。それから「いたずらものはいないかな」と云って、旗を担いで往来を歩いて来たのもありました。子供の時分ですからその声を聞くと、ホラ来たと云って逃げたものである。よくよく聞いて見ると鼠取りの薬を売りに来たのだそうです。鼠のいたずらもので人間のいたずらものではないというのでやっと安心したくらいのものである。そんな妙な商売は近頃とんと無くなりましたが、締括った総体の高から云えば、どうも今日の方が職業というものはよほど多いだろうと思う。単に職業に変化があるばかりでなく、細かくなっている。現に唐物屋というものはこの間まで何でも売っていた。襟とか襟飾りとかあるいはズボン下、靴足袋、傘、靴、たいていなものがありました。身体へつけるいっさいの舶来品を売っていたと云っても差支ない。ところが近頃になるとそれが変ってシャツ屋はシャツ屋の専門ができる、傘屋は傘屋、靴屋は靴屋とちゃんと分れてしまいました。靴足袋屋……これはまだ専門はできないようだが、今にできるだろうと思います。現に日本の足袋屋は専門になっています。十文のをくれと云えば十文のをくれる、十一文のをくれと云えば十一文のをくれる。私が演説を頼まれて即席に引受けられないのは、足袋屋みたいにちょっと出来合いがないからです。どうか十文の講演をやってくれ、あそこは十一文 甲高の講演でなければ困るなどと注文される。そのくらいに私が演説の専門家になっていれば訳はありませんが私の御手際はそれほど専門的に発達していない。素人が義理に東京からわざわざ明石辺までやって来るというくらいの話でありますから、なかなかそう旨くはいきませぬ。足袋屋はさておいて食物屋の方でもチャンとした専門家があります。例えば牛肉も鳥の肉も食わせる所があるかと思うと、牛肉ばかりの家があるし、また鳥の肉でなければ食わせるないという家もある。あるいはそれが一段細かくなって家鴨よりほかに食わせる店もある。しまいには鳥の爪だけ食わせる所とか牛の肝臓だけ料理する家ができるかも知れない。分れて行けばどこまで行くか分かりません。こんなに劇しい世間だからしまいには大変なことになるだろうと思う。とにかく職業は開化が進むにつれて非常に多くなっていることが驚くばかり眼につくよう

です。ところがこれは当り前のことで学問の研究の上から世の中の変化とでも云いましょうか、
ばくぜん
漠然たる社会の傾向とでも云いましょうか、必然の勢そういうように割れて細かになって来るの
であります。これは何も私の発明した事実でも何でも無い、昔から人の言っていることであり
ます。昔の職業というものは大まかで、何でも含んでいる。ちょうど田舎の呉服屋みたいに、反
物を売っているかと思うと傘を売っておったり油も売るといふ、何屋だか分らぬ万事いっさいを
売の家というようなものであったのが、だんだん専門的に傾いていろいろに分れる末はほとんど
想像がつかないところまで細かに延びて行くのが一般の有様と行って差支ないでしょう。

ところでこの事実をずっと想像に訴えて遠い過去に 溯 ったらどうなるでしょう。あるいは想
像でも溯れないかも知れないけれども、この事実の中に含まれている論理の力で後ろの方へ逆行
したらどんなものでしょう。今言う通り昔は商売というものの数が少なかった。職業の数が少
なくて、世間の人もそのわずかな商売をもって満足しておったという訳なのだから、あるいは
かさ
傘を買いに行っても傘がない、きもの
衣物を買いに行っても衣物がないという時代がないとも限らない
。私はかつて熊本におりましたが、或る時 灰吹 を買いに行ったことがある。ところが灰吹はない
と云う。熊本中どこを尋ねても無いかと云ったら無いだろうと云う。じゃ熊本では煙草を喫まな
か
いか痰を吐かないかというところと現に煙草を喫んでいる。それでは灰吹はどうするんだと聞くと、裏
の藪へ行つて竹を伐つて来て 拵 えるんだと教えてくれました。裏の藪から伐つて来て、青竹の
灰吹で間に合せておけばよいと思つているところでは灰吹は売れない訳である。したがって売
つては行かないのである。そういう風に自分で人の厄介にならずに裏の藪へ行つて竹を伐つ
て灰吹を造るごとく、人のお世話にならないで自分の身の 囲り をなるべく多く足す、また足さな
ければならない時代があつたものでしょう。さてその事実を極端まで辿つて行くと、いっさい万
事自分の生活に關した事は衣食住ともいかなる方面にせよ人のお蔭を 被 らないで、自分だけで
用を弁じておつた時期があり得るといふ推測になる。人間がたった一人で世の中に存在している
ということは、ほとんど想像もできないかも知れないし、またそこまで論理を頼りに推詰めて考
える必要もない話ですが、そこまで行かないとちょっと講話にならないから、まあそうしておく
のです。すなわち誰のお世話にもならないで人間が存在していたという時代を思い浮べて見る。
例えば私がこの着物を自分で織つて、この襟を自分で 拵 えて、総て自分だけで用を弁じて、何
も人のお世話にならないという時期があつたとする。また有つたとしてもよいでしょう。そう
いう時期が何時かあつたらどうするといふ意味ではないが、まああると仮定して御覽なさい。そう
したらそういう時期こそ本当の独立独行といふ言葉の適当に使える時期じゃないでしょうか。人
から月給を貰う心配もなければ朝起きて人にお早うと言わなければ機嫌が悪いといふ苦勞もない
。生活上寸毫も人の厄介にならずに暮して行くのだから平氣なものである。人にすくなくとも迷
惑をかけないし、また人にいささかの恩義も受けなくて済むのだから、これほど都合の好いこと
はない。そういう人が本当の意味で独立した人間といわなければならないでしょう。實際我々は
時勢の必要上そうは行かないようなものの腹の中では人の世話にならないでどこまでも一本立
でやって行きたいと思つているのだからつまりはこんな太古の人を一面には理想として生きて
いるのである。けれども事実やむをえない、仕方がないからまず衣物を着る時には呉服屋の厄介に

なり、お菜^{さい}を拵^つえる時には豆腐屋の厄介になる。米も自分で搗くよりも人の搗いたのを買うということになる。その代りに自分は自分で米を搗き自分で着物を織ると同程度の或る専門的の事を人に向ってしつとあるという訳になる。私はいまだかつて衣物を織ったこともなければ、靴足袋^{くつたび}を縫ったこともないけれども、自ら縫わぬ靴足袋、あるいは自ら織らぬ衣物の代りに、新聞へ下らぬ事を書くとか、あるいはこういう所へ出て来てお話をするとかして埋合せをつけているのです。私ばかりじゃない、誰でもそうです。するとこの一步専門的になるというのはほかの意味でも何でも無い、すなわち自分の力に余りある所、すなわち人よりも自分が一段と抽^{ぬき}んでている点に向って人よりも仕事を一倍にして、その一倍の報酬に自分に不足した所を人から自分に仕向^{こく}けて貰って相互の平均を保ちつつ生活を持続するという事に帰着する訳であります。それを極むずかしい形式に現わすというと、自分のためにする事はすなわち人のためにすることだという哲理をほのめかしたような文句になる。これでもまだちょっと分らないなら、それをもっと数学的に言い現わしますと、己のためにする仕事の分量は人のためにする仕事の分量と同じであるという方程式が立つのであります。人のためにする分量すなわち己のためにする分量であるから、人のためにする分量が少なければ少ないほど自分のためにはならない結果を生ずるのは自然の理であります。これに反して人のためにする仕事を余計すればするほど、それだけ己のためにするものもまた明かな^{いんねん} 因縁^{めいりょう} であります。この関係を最も簡単にかつ 明瞭^{がた} に現わしているのは金ですな。つまり私が月給を拾五円なら拾五円取ると、拾五円方人のために尽しているという訳で取りも直^{ふちよう} さずその拾五円が私の人に対して為し得る仕事の分量を示す 符丁^{せいだ} になっています。拾五円方人に対する労力を費す、そうして拾五円現金で入ればすなわちその拾五円は己のためにする拾五円に過ぎない。同じ訳で人のためにも千円の働^{せいたく} きができれば、己のために千円使うことができるのだから誠に結構なことで、諸君もなるべく精出して人のためにお働^{ぜいたく} きになればなるほど、自分にもますます 贅沢^{うち} のできる余裕を御作りになると変りはないから、なるべく人のために働く分別をなさるが宜しかろうと思う。

もっとも自分のためになると云ってもためになり方はいろいろある。第一その中から税などを払わなければならない。税を出して人に月給をやったり、巡查を雇っておいたり、あるいは国務大臣を馬車に乗せてやったりする。もっとも一人じゃアこれだけの事はできません、我々大勢で金を出してやるのですが、^{ひつきょう} 畢竟^け ずるにあの税などもやはり自分のために出すのです。国務大臣が馬車や自動車に乗って怪しからんと言ったってそれは野暮の云う事です。我々が税を出して乗らしておいてやるので国務大臣のためじゃない、つまり己のためだと思えば間違はない。だから時々自動車ぐらい借りに行ってもよからうと思う。税はそのくらいにしてこのほか己のためにするものは衣食住と他の贅沢費になります。それを合算すると、つまり銀行の帳簿のように収入と支出と平均します。すなわち人のためにする仕事の分量は取りも直^と さず己のためにする仕事の分量という方程式がちゃんと数字の上に現われて参ります。もっとも吝^{けち} 嗇^た で蓄^{やつ} めている奴があるかも知れないが、これは例外である。例外であるが蓄めていればそれだけの労力というものを後^{あと} へ^{くりこ} 繰^{りくつ} すのだから、やはり同じ理窟^{にく} になります。よくあいつは遊んでいて憎らしいとかまたはごろ

ごろして^{うらや}いて羨ましいとか金持の評判をするようですが、そもそも人間は遊んでいて食える訳のものではない。遊んでいるように見えるのは^{ふところ}懐にある金が働いてくれているからのもので、その金というものは人のためにする事なしにただ遊んでいてできたものではない。親父が額に汗^{おやじ}を出した記念だとかあるいは婆さんの^{へそくり}臍線だとか中には^{いんねんつ}因縁付きの悪い金もありましょうけれども、とにかく何らか人のためにした^{ふちょう}符徴、人のためにしてやったその報酬というものが、つまり自分の金になって、そうして自分はそのお蔭でもって^{かげ}懐手^{ふところ}をして遊んでいられるという訳でしょう。職業の性質というものはまあざっとこんなものです。

そこでネ、人のためにするという意味を間違えてはいけませんよ。人を教育するとか導くとか精神的にまた道義的に働きかけてその人のためになるという事だと解釈されるとちょっと困るのです。人のためにというのは、人の言うがままにとか、欲するがままにといういわゆる卑俗の意味で、もっと手短かに述べれば人の^{ごきげん}御機嫌を取ればというくらいの事に過ぎんです。人にお世辞^{さしつかえ}を使えばと云い変えても^{さしつかえ}差支ないくらいのもので、だから御覧なさい。世の中には徳義的に観察するとずいぶん怪しからぬと思うような職業がありましょう。しかもその怪しからぬと思うような職業^{とせい}を渡世^{とせい}にしている奴は我々よりはよっぽどえらい生活をしているのがあります。しかし一面から云えば怪しからぬにせよ、^{ふらち}道德問題として見れば不埒にもせよ、事実の上から云えば最も人のためになることをしているから、それがまた最も己のためになって、最も^{ぜいたく}贅沢^{きわ}を極めていると言わなければならぬのです。道德問題じゃない、事実問題である。現に^{げいしや}芸妓^{げいしや}というようなものは、私はあまり関係しないからして^{くわ}精しいことは知らんけれどもとにかく一流の芸妓と^{よりどり}か何とかなるとちょっと指環を買うのでも千円とか五百円という高価なものの中から^{よりどり}撰取^{よりどり}をして余裕があるように見える。私は今ここにニッケルの時計しか持っておらぬ。高尚な意味で云ったら芸妓よりも私の方が人のためにする事が多くはないだろうかという疑もあるが、どうも芸妓ほど人の気に入らない事もまたたしからしい。つまり芸妓は有徳な人だからああ云う贅沢ができる、いくら学問があっても徳の無い人間、人に好かれない人間というものは、ニッケルの時計ぐらい持って我慢しているよりほか仕方がないという結論に落ちて来る。だから私のいう人のためにする^{しこう}という意味は、一般の人の弱点嗜好^{しこう}に投ずると云う大きな意味で、小さい道德——道德は小さくありませぬが、まず事実の一部分に過ぎないのだから小さいと云っても^{さしつかえ}差支^{さしつかえ}ないでしょう。そう云う高尚ではあるが偏狭な意味で人のためにするのではなく、天然の事実そのものを引きくめて何でもかでも人に歓迎されるという意味の「ためにする」仕事を指したのであります。

そこで職業上における己のため人のためと云う事は以上のように御記憶を願っておいて、話がまた後戻りをする恐れがあるかも知れないが、前^{ぜん}申した通り人文発達の順序として職業が大変割れて細かくなると妙な結果を我々に与えるものだからその結果を一口御話を^{さくそう}して、そうして先へ進みたいと思います。私の見るところによると職業の分化^{さくそう}錯綜から我々の受ける影響は種々ありましようが、そのうちに見逃す事のできない一種妙な者があります。というのはほかでもないが開化の潮流が進めば進むほど、また職業の性質が分れば分れるほど、我々は片輪^{かたわ}な人間になつてしまうという妙な現象が起るのであります。言い換えると自分の商売^{かたむ}がしだいに専門的に傾いてくる上に、生存競争のために、人一倍の仕事で済んだものが二倍三倍乃至四倍とだんだん速力を早めておいつかなければならないから、その方だけに時間と根気を費しがちであると同時に、お隣りの事や一軒^{かいもく}おいたお隣りの事が皆目分らなくなってしまうのであります。こういうように人間が千筋も万筋もある職業線の上のただ一線しか往来しないで済むようになり、また他の線へ移る余裕がなくなるのはつまり吾人の社会的知識が狭く細く切りつめられるので、あたかも自ら好んで不具になると同じ結果だから、大きく云えば現代の文明は完全な人間を日に日に片輪者^{うちくず}に打崩しつつ進むのだと評しても差支ないのであります。極^{ごく}の野蛮時代で人のお世話には全くならず、自分で身に纏^{まと}うものを捜し出し、自分で井戸を掘って水を飲み、また自分で木の実か何かを拾って食って、不自由なく、不足なく、不足があるにしても苦しい顔もせずに我慢をしていれば、それこそ万事人に待つところなき点において、また生活上の知識をいっさい自分に備えたる点において完全な人間と云わなければなりません。ところが今の社会では人のお世話にならないで、一人前に暮らしているものはどこをどう尋ねたって一人もない。この意味からして皆不完全なものばかりである。のみならず自分の専門は、日に月に、年には無論のこと、ただ狭く細く^{はり ほりぬき}なって行きさえすればそれですむのである。ちょうど針で掘抜井戸を作るとでも形容してしかるべき有様になって行くばかりです。何商売を例に取っても説明はできますが、この状態を最もよく証明しているものは専門学者などだろうと思います。昔の学者はすべての知識を自分一人で^{しょ}背負って立ったように見えますが、今の学者は自分の研究以外には何も知らない私が前申した意味の不具^{そろ}が揃っているのであります。私のような者でも世間ではたまに学者扱にしてくれますが、そうするとやっぱり不具の一人であります。なるほど私などは不具に違いない、どうもすくなくとも普通のことを知らない。区役所へ出す転居届の書き方も分らなければ、地面を売るにはどんな^{こしら}な手続をしていいかさえ分らない。綿は綿の木のだんな所をどうして拵^{こしら}えるかも解し得ない。玉子豆腐^{たまごどうふ}はどうしてできるかこれまた不明である。食うことは知っているが拵^{こしら}える事は全く知らない。その他味淋^{みりん}にしろ、醤油にしろ、なんにしろかにしろすべて知らないことだらけである。知識の上において非常な不具と云わなければなりません。けれどもすべてを知らない代りに一カ所か二カ所人より知っていることがある。そうして生活の時間をただその方面にばかり使ったものだから、完全な人間をますます遠ざかって、実に突飛なものになり終せてしまいました。私ばかりではない、かの博士とか何とか云うものも同様であります。あなた方は博士と云うと諸事万端人間いっさい天地宇宙の事を皆知っているように思うかも知れないが全くその反対で、実は不具の不具の最も不具な発達を遂げたものが博士になるのです。それだから私は博士を断りま

した。しかしあなた方は——手を叩いたって駄目です。現に博士という名にごまかされているのだから駄目です。例えば明石なら明石に医学博士が開業する、片方に医学士があるとする。そうすると医学博士の方へ行くでしょう。いくら手を叩いたって仕方がない、ごまかされるのです。内情を御話すれば博士の研究の多くは針の先きで井戸を掘るような仕事をするのです。深いことは深い。掘抜きだから深いことは深い、いかにせん面積が非常に狭い。それを世間ではすべての方面に深い研究を積んだもの、全体の知識が万遍なく行き渡っていると誤解して信用をおきすぎるのです。現に博士論文と云うのを見ると存外細かな題目を捕えて、自分以外には興味もなければ知識もないような事項を穿鑿しているのが大分あるらしく思われます。ところが世間に向つてはただ医学博士、文学博士、法学博士として通っているからあたかも総ての知識をもっているかのように解釈される。あれは文部省が悪いのかも知れない。虎列刺病博士とか腸窒扶斯博士とか赤痢博士とかもっと判然と領分を明らかにした方が善くはないかと思う。肺病患者が赤痢の論文を出して博士になった医者さしつかえの所へ行つたって 差支 はないが、その人に博士たる名誉を与えたのは肺病とは没交渉の赤痢であつて見れば、単に博士の名で肺病を担ぎ込んで 勘違 になるかも知れない。博士の事はそのくらいにしてただ以上をかい撮んで云うと、吾人は開化の潮流に押し流されて日に日に不具になりつつあるということだけは確かでしょう。それをほかの言葉でいうと自分一人ではとても生きていられない人間になりつつあるのである。自分の専門にしていることにかけては、不具的に非常に深いかも知れぬが、その代り一般的の事物については、大変に知識が欠乏した妙な変人ばかりできつつあるという意味です。

私は職業上己のためとか人のためとか云う言葉から出立してその先へ進むはずのところをツイわき道へそれて職業上の片輪という事を御話しし出したから、ついでにその片輪の所置について一言申上げて、また己のため人のための本論に立ち帰りたい。順序の乱れるのは口に駆られる講演の常として御許しを願います。

そこで世の中では——ことに昔の道德観や 昔堅気 の親の意見やまたは一般世間の信用などから云いますと、あの人は家業に精を出す、感心だと云って賞めそやします。いわゆる家業に精を出す感心な人というのは取も直さず真黒になって働いている一般的の知識の欠乏した人間に過ぎないのだから面白い。露骨に云えば自ら進んで不具になるような人間を世の中では賞めているのです。それはとにかくとして現今のように各自の職業が細く深くなって知識や興味の面積が日に日に狭められて行くなれば、吾人は表面上社会的共同生活を営んでいるとは申しながら、その実銘々 孤立して山の中に立て籠っていると一般で、隣り合せに居をトしていながら心は天涯 にかげ離れて暮しているとでも評するよりほかに仕方がない有様に 陥 って来ます。これでは相互を了解する知識も同情も起りようがなく、せつかくかたまって生きていても内部の生活はむしろバラバラで何の連鎖もない。ちょうど乾涸びた 糶 のようなもので一粒 一粒に孤立しているのだから根ッから面白くないでしょう。人間の職業が専門的になってまた各々自分の専門に頭を突込んで少しでも外面を見渡す余裕がなくなると当面の事以外は何も分らなくなる。また分らせようと

さしつかえ
いう興味も出て来にくい。それで 差支 ないと云えばそれまでであるが、現に家業にはいくら精
通してもまたいくら勉強してもそればかりじゃどこか不足な訴が内部から 萌^{きざ}して来て何となく充
分に人間的な心持が味えないのだからやむをえない。したがってこの孤立支離の弊を何とかして
矯^ためなければならなくなる。それを矯める方法を御話しするためにわざわざこの壇上に現われた
のではないから 詳^{くわ}しい事は述べませんが、また述べるにしたところで大体はすでに諸君も御承知
の事であるが、まあ物のついでだから一言それに触れておきましょう。すでに個々介立の弊が相
互^{きはく}の知識の欠乏と同情の稀薄から起ったとすれば、我々は自分の家業商売^おに逐われて日もまた足
らぬ時間しかもたない身分であるにもかかわらず、その乏しい余裕を割いて一般の人間を広く
了解^{りょうかい} しましたこれに同情し得る程度に互の 温味^{あたかみ} を醸^{かも}す法を講じなければならない。それにはこ
ういう公会堂のようなものを作って時々講演者などを聘^{へい}して知識上の 啓発^{けいはつ}をはかるのも便法であ
りますし、またそう知的の方面ばかりでは窮屈すぎるから、いわゆる社交機関を利用して、互の
歓情^{つく}を罄^つすのも良法でありましょう。時としては方便の道具として酒や女を用いても好いくらい
のものでしょう。実業家などがむずかしい相談をするのかえって 見当違^{けんとうちがい} の待合などで落合っ
て要領を得ているのも、全く酒色という人間の窮屈を融^とかし合う機械^{そなわ}の 具^{そなわ}った場所で、その影
響の下に、角^{かど}の取れた同情のある人間らしい心持で相互に所置ができるからだろうと思います。
現に事が 纏^{まとま}るといふ実用上の言葉が人間として彼我打ち解けた非実用の快感状態から出立しな
ければならないのでも分りましょう。こういうと私が酒や女をむやみに推薦するようでちょっと
おかしいが、私の申上げる主意はたとい弊害の多い酒や女や待合などが交際の機関として上流の
人に用いられるのでも、人間は個々別々に孤立して互の融和同情を眼中に置かず、ただ自家専門
の職業にのみ腐心してはられないものだという例に御話したくらのものであります。本来を
云うと私はそういう社交機関よりも、諸君が本業に費やす時間以外の余裕を挙げて文学書を御読
みにならん事を希望するのであります。これは我が田へ水を引くような議論にも見えますが、元
来文学上の書物は専門的の述作ではない、多く一般の人間に共通な点について批評なり叙述なり
試みた者であるから、職業のいかにかわらず、階級のいかにかわらず赤裸々の人間を
赤裸々に結びつけて、そうしてすべての他の 墻壁^{しょうへき} を打破する者でありますから、吾人が人間と
して相互に結びつくためには最も立派でまた最も弊の少ない機関だと思われるのです。少くとも
芸妓を上げて酒を飲んだと同等以上の効果がありそうに思われるのであります。あなた方もこ
ういふ公会堂へわざわざこの暑いのに集まって、私のような者の言うことを黙って聴くような勇氣
があるのだから、そういう楽な時間を利用して少し御読みになったらいかがだろうと申したいの
です。職業が細くなりまた忙がしくなる結果我々が不具になるが、それはどうして 矯正^{きょうせい} する
かという問題はまずこのくらいにして、この講演の冒頭に述べた己のためとか人のためとかいう
議論に立ち帰ってその 約^{つづま}りをつけてこの講演を結びたいと思います。

それで前申した己のためにするとか人のためにするとかいう見地からして職業を観察すると、
職業というものは要するに人のためにするものだという事に、どうしても根本義を置かなければ
なりません。人のためにする結果が己のためになるのだから、元はどうしても他人本位である。

すでに他人本位であるからには種類の選択分量の多少すべて他を目安にして働かなければなら
ない。要するに取捨興廢の權威共に自己の手中にはない事になる。したがって自分が最上と思
製作を世間に^{すす}勧めて世間は^{かえり}いっこう顧みなかったり自分は心持が好くないので休みたくても世
間は平日のごとく要求を^{ほしいまま}恣にしたりすべて己を曲げて人に従わなくては商売にはならない。
この自己を曲げるという事は成功には大切であるが心理的にははなはだ厭なものである。^{いや}就中^{なかんずく}
最も厭なものはどんな好な道でもある程度以上に^し強いられてその性質が^{けんお}しだいに嫌悪に変化する
時にある。ところが職業とか専門とかいうものは前申す通り自分の需用以上その方面に働いてそ
うしてその自分に^あ不要な部分を挙げて他の使用に供するのが目的であるから、自己を本位にして
云えば当初から不必要でもあり、厭でもある事を強いてやるという意味である。よく人が商売と
なると何でも厭になるものだと云いますがその厭になる理由は全くこれがためなのです。いやし
くも道楽である間は自分に勝手な仕事を自分の適宜な分量でやるのだから面白いに違いないが、そ
の道楽が職業と変化する^{せつな}刹那に今まで自己にあった權威が突然他人の手に移るから快樂がたちま
ち苦痛になるのはやむをえない。打ち明けた御話が己のためにすればこそ好なので人のためにし
なければならぬ義務を^{くく}括りつけられればどうしたって面白くは行かないにきまっています。元
来己を捨てるということは、道德から云えばやむをえず不徳も犯そうし、知識から云えば己の程
度を下げて無知な事も云おうし、人情から云えば己の義理を低くして阿漕な仕打もしようし、趣
味から云えば己の芸術眼を下げて下劣な好尚に投じようし、十中八九の場合悪い方に傾きやすい
から困るのである。例えば新聞を^{こしら}拵えてみても、あまり下品な事は書かない方がよいと思いな
がら、すでに商売であれば販売の形勢から考え営業の成立するくらいには俗衆の^{ごきげん}御機嫌を取らな
ければ立ち行かない。要するに職業と名のつく以上は趣味でも徳義でも知識でもすべて一般社会
が本尊になって自分はこの本尊の鼻息を伺って生活するのが自然の理である。

ただここにどうしても他人本位では成立たない職業があります。それは科学者哲学者もしくは
芸術家のようなもので、これらはまあ特別の一階級とでも見做すよりほかに仕方がないのです。
哲学者とか科学者というものは直接世間の実生活に関係の遠い方面をのみ研究しているのだから
、世の中に気に入ろうとしたって気に入れる訳でもなし、世の中でもこれらの人の態度いかんで
その研究を買ったり買わなかったりする事も極めて少ないには違いないけれども、ああいう種類の
人が物好きに実験室へ入って朝から晩まで仕事をしたり、または書齋に閉じ籠^{こも}って深い考に沈ん
だりして万事を等閑に附している有様を見ると、世の中にあれほど己のためにしているものはない
だろうと思わずにはいられないくらいです。それから芸術家もそうです。こうもしたらもっと
評判が好くなるだろう、ああもしたらまだ活計向の助けになるだろうと傍^{はた}の者から見ればいろい
ろ忠告のしたいところもあるが、本人は^{さりやく}けっしてそんな作略はない、ただ自分の好な時に好なも
のを描いたり作ったりするだけである。もっとも当人がすでに人間であって相応に物質的嗜欲の^{しょく}
あるのは無論だから多少世間と折合って歩調を改める事がないでもないが、まあ大体から云うと
自我中心で、極く卑近の意味の道德から云えばこれほどわがままのものはない、これほど道楽な

ものはないくらいです。すでに御話をした通りおよそ職業として成立するためには何か人のためにする、すなわち世の嗜好しこうに投ずると一般の御機嫌ごきげんを取るところがなければならないのだが、本来から云うと道楽本位の科学者とか哲学者とかまた芸術家とかいうものはその立場からしてすでに職業の性質を失っていると云わなければならない。実際今の世で彼らは名前には職業として存在するが実質の上ではほとんど職業として認められないほど割に合わない報酬を受けているのでこの辺の消息はよく分るでしょう。現に科学者哲学者などは直接世間と取引しては食って行けないからたいていは政府の保護の下に大学教授とか何とかいう役になってやっと露命をつないでいる。芸術家でも時に容れられず世から顧かえりみられないで自然本位を押し通す人はずいぶんさんたん惨澹たる境遇ちんりんに沈淪たいがどうしているものが多いのです。御承知の大雅堂でも今でこそ大した画工であるがその当時ごう毫も世間向の画をかかなかつたために生涯しょうがい真葛まくずが原はらの陋居ろうきよに潜ひそんでまるで乞食と同じ一生を送りました。仏蘭西のミレーも生きていた間は常に物質的の窮乏に苦しめられていました。またこれは個人の例ではないが日本の昔に盛んであった禅僧の修行などと云うものも極端な自然本位の道楽生活であります。彼らは見性けんしょうのため究真のためすべてを抛なげうって坐禅の工夫くふうをします。黙然と坐している事が何で人のためになりましょう。善い意味にも悪い意味にも世間とは没交渉である点から見て彼ら禅僧は立派な道楽ものであります。したがって彼らはその苦行難行に対して世間から何らの物質的報酬を得ていません。麻の法衣を着て麦の飯を食ってあくまで道を求めていました。要するに原理は簡単で、物質的に人のためにする分量が多ければ多いほど物質的に己のためになり、精神的に己のためにすればするほど物質的には己の不為になるのであります。

以上申し上げた科学者哲学者もしくは芸術家の類たぐいが職業として優ゆうに存在し得るかは疑問として、これは自己本位でなければとうてい成功しないことだけは明かなようであります。なぜなればこれらが人のためにすると己というものは無くなってしまふからであります。ことに芸術家で己の無い芸術家は蟬せみの脱殻ぬけがら同然で、ほとんど役に立たない。自分に気の乗った作ができなくてただ人に迎えられたい一心でやる仕事には自己という精神が籠こもるはずがない。すべてが借り物になって魂の宿る余地がなくなるばかりです。私は芸術家というほどのものでもないが、まあ文学上の述作をやっているから、やはりこの種類に属する人間と云って差支さしつかえないでしょう。しかも何か書いて生活費を取って食っているのです。手短かに云えば文学を職業としているのです。けれども私が文学を職業とするのは、人のためにするすなわち己を捨てて世間の御機嫌ごきげんを取り得た結果として職業として見ると見るよりは、己のためにする結果すなわち自然なる芸術的心術の発現の結果が偶然人のためになって、人の気に入っただけの報酬が物質的に自分に反響して来たのだと見るのが本当だろうと思います。もしこれが天てんから人のためばかりの職業であって、根本的に己を枉まげて始て存在し得る場合には、私は断然文学を止めなければならないかも知れぬ。幸いにして私自身を本位にした趣味なり批判なりが、偶然にも諸君の気に合って、その気に合った人だけに読まれ、気に合った人だけから少なくとも物質的の報酬、(あるいは感謝でも宜しい)を得つつ今日まで押して来たのである。いくら考えても偶然の結果である。この偶然が壊れた日にはどっち本位にするかという、私は私を本位にしなければ作物が自分から見て物にならない。私ばかりじゃない誰しも芸術家である以上はそう考えるでしょう。したがってこういう場合

には、世間が芸術家を自分に引付けるよりも自分が芸術家に食付いて行くよりほかに仕様が
ないのであります。食付いて行かなければそれまでという話である。芸術家とか学者とかいうものは、
この点においてわがままのものであるが、そのわがままなために彼らの道において成功する。
他の言葉で云うと、彼らにとっては道楽すなわち本職なのである。彼らは自分の好きな時、自分
の好きなものでなければ、書きもしなければ 拵^{こしら} えもしない。至って 横着^{おうちやく} な道楽者であるがす
でに性質上道楽本位の職業をしているのだからやむをえないのです。そういう人をして己を捨て
なければ立ち行かぬように強^し いたりまたは 否応^{いやおう} なしに天然を枉^ま げさせたりするのは、まずその人
を殺すと同じ結果に 陥^{おちい} るのです。私は新聞に関係がありますが、 幸^{さいわい} にして社主からしてモツ
と売れ口のよいような小説を書けとか、あるいはモツとたくさん書かなくちゃいかんとか、そう
いう外圧的の注意を受けたことは今日までとんとありませぬ。社の方では私に私本位の下に述作^あ
する事を大体の上で許してくれつつある。その代り月給も上げてくれないが、いくら月給を上げ
てくれてもこういう取扱を変じて万事営業本位だけで作物の性質や分量を指定されてはそれこそ
大いに困るのであります。私ばかりではないすべての芸術家科学者哲学者はみなそうだろうと
思う。彼らは一も二もなく道楽本位に生活する人間だからである。大変わがままのようであるけ
れども、事実^{こうさん} そうなのである。したがって 恒産のない以上科学者でも哲学者でも政府の保護か個
人の保護がなければまあ昔の禅僧ぐらいの生活を標準として暮さなければならぬはずである。
直接世間を相手にする芸術家に至ってはもしその述作なり製作がどこか社会の一部に反響^{がし} を起
して、その反響が物質的報酬となって現われて来ない以上は餓死するよりほかに仕方がない。己
を枉^{がし} げるという事と彼らの仕事とは全然妥協を許さない性質のものだからである。

私は職業の性質やら特色についてはじめに一言を費やし、開化の 趨勢上^{すうせいじょう} その社会に及ぼす影
響を述べ、最後に職業と道楽の関係を説き、その末段に道楽的職業というような一種の変体のあ
る事^{ごふいちょう} を 御吹聴^{ごふいちょう} に及んで私などの職業がどの点まで職業でどの点までが道楽であるかを諸君に大
体^{りかい} 理會せしめつつもりであります。これでこの講演を終わります。

——明治四十四年八月明石において述——



道楽と職業

平成二十三年三月九日 初版

著者

夏目 漱石

発行所

藍岩堂